

うるし

け し

漆の花・白い罌粟



立原正秋

漆の花・白い罌粟



立原正秋

新潮社版

立原正秋選集る
漆の花・白い罌粟

一九七五年二月二〇日発行
一九七八年九月一五日二刷

著者 立原正秋

装幀者 砦田圭子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一二一
編集部(03)二六六―五四一一

振替東京四―八〇八

二光印刷 新宿加藤製本

定価九五〇円



〈第五回配本〉

© 1975. Masaaki Tachihara. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛御送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

立原正秋選集 目次

漆の花 5

白い罌粟 43

女の店 98

トランプ遊び 110

春の病葉 125

最後の仕舞 148

死者への讃歌 171

死の季節 180

刃物 215

合わせ鏡 253

扇 288

相聞歌 300

渚通り 312

立原正秋選集 3

漆の花

1

鎌倉彫は、仏師が、宋人の竈^{もたら}した堆朱^{つじし}の技法をまねて仏具を刻んだのはじまる、と伝えられているが、今日、鎌倉彫で仏具を刻む者はいない。多くは桂^{かへ}や銀杏^{ぎんぎよう}や楓^{かえで}を乾燥させてそこに花を刻み人物を彫りこんで、盆や椀、文机、指物の小物入、硯箱などに仕上げている。実用品が造られたとしても、それらはいずれも贅沢^{ぜいたく}な工芸品に近かった。

しかし、今日、鎌倉の街を歩いて鎌倉彫の店をのぞいても、真に工芸品の名に値する漆器をならべてある店は数えるほどしかない。歴史が浅い故もあったが、多くは造る人が職人の域をでていないのが理由のようである。職人気質に徹した人の作品ならまだよかったが、下駄屋が兼業する彫物に工芸品がうまれるわけがなかった。事実、鎌倉時代から明治の初めまで、鎌倉彫の歴史は空白である。

鎌倉彫扇ヶ谷^{おぎがや}派四代目の隆正^{たかまさ}は、それまでの鎌倉彫の職人の慣例を破り、二人の息子を美術学校にあげた。長男の麟太郎^{りんたろう}は、昭和二十七年に上野の彫刻科を卒業し、次男の

竜次郎はそれより二年後に私立美術学校のデザイン科をでた。扇ヶ谷家は、代々、雪の下の一角に扇ヶ谷春慶堂の看板をかかげてきたが、職人の域をでていなかった。扇ヶ谷派を開いたのは飛騨^{ひだ}春慶塗^{しゅんけいぬ}の一派からでた人で、狷介^{けんかい}な職人であった。狷介な血筋は代々受けつがれてきたが、隆正の代にいたって変った。隆正が考えたのは、歴史の浅い鎌倉彫を工芸品の域に高めることであつた。職人の造るものは、結局は腕のよい桶屋^{かづや}のつくる桶と同じであつた。

二人の息子を美術学校にあげた隆正は、同業者の羨望^{せんぼう}と嫉妬^{しど}をよんだが、しかし二人の息子はすでに同業者がまねてできない作品をうみだしていた。職人の父親の目からみても、息子達の作品が職人の域をでていることはあきらかであつた。

麟太郎の作品は緻密^{ちみつ}で古典的であつた。抽象化をきらい、それまでの鎌倉彫の方法をそのまま踏襲しながら、なお深みのある作品をうんでいた。彼は斬新さを極度にきらい、弟の作品は一顧だにしなかった。彼によれば、デザイン科が美術学校に設けられたのがあやまりで、弟のつくるものはそこの看板描きの作品と同じである、というのであつた。

一方の竜次郎の作品は派手で大胆であつた。それまでの鎌倉彫の世界ではとりいれたことのない動物、魚、風景を抽象化して彫りあげた。斬新な作風はデザインを学んだこ

とからきたもののようにであった。

兄弟は面とむかつては争わなかったが、父の隆正が高血圧で倒れて亡くなった昭和三十三年の冬に、離反は決定的となった。兄弟の母はそれより四年前に亡くなっていた。

隆正の没後六カ月して、竜次郎は、結婚したばかりの妻京子をつれ春慶堂をでて由比ヶ浜通りに一戸をかまえた。彼は店を飛驒堂と名づけた。それまで春慶堂に兄の古典的な作品といっしょに並べてあった自分の作品をひきあげ、飛驒堂に並べてみると、新しさがやはりはっきりした。生家の春慶堂をでるときにはさすがに一抹の寂莫感が彼のなかをよこぎって去ったが、自分が兄に容れられる道はないように思えた。一方の麟太郎は、亡父の遺志を継ぐのは俺がいにはいない、という自負に充ち、家をでる弟を冷やかな目で見送った。彼はよわい三十にしてすでに頑迷で陰湿な職人気質におちこんでしまっていた。

飛驒堂を構えた竜次郎は、水を得た魚のように不羈奔放な作品を造りだし、店は繁盛した。だが、春慶堂では、竜次郎に去られてからは店はさびれる一方で、かつて竜次郎の派手な作品を求めて出入りしていた客足は途絶え、たまた、父の代からきていた客が訪れてくるくらいであった。

馬鹿めが！ 客はあいつのデザインに目がくらんでいるのだ、なにが鎌倉彫だ！ 麟太郎は独り自分の工房で飛驒堂を望見し、弟にむかつて罵声を浴びせていた。

弟は、雪の下の一角から兄がこつちを見て嘲笑を浴びせているのを知っていた。しかし彼は笑っていた。その根性があれば兄さんもいまに立派な作品をうみだせるだろう、だが、その古さだけはどうにもならんのだ、兄さんはせっかく学校で彫刻を身につけておきながら、いったいなにが原因で昔気質の職人になりさがってしまったのか。彼は兄の罵声をききながらも、心のどこかで、兄と和解したいと望んでいた。作風が異なるというだけで兄弟が争わなければならない理由はないはずであった。

2

飛驒堂の六坪の店内は、正面出入口のほかに東側と西側の武者窓からあかりをとっているが、なかはず暗く、ひんやりしている。出入口の南側では、木蓮、牡丹、芍薬が華麗さを競い、東側には鉄線蓮、あざみ、どくだみ、紫菀、罌粟の花が咲きみだれ、店の中央のガラス棚のなかでは半夏生の花がひっそり咲いている。北側の壁に造りつけた陳列棚には能舞台の人物、四君子を彫りつけた盆や指物、風景や動物、魚を抽象化して刻みつけた壁かけ等が並べてある。それらの花々や人物は、外界の季節の移りかわりにかわりなしに、四季を通じて店内で咲いてきたし、舞ってきた。六坪の店内でそれらの作品がゆとりをもち贅沢に場

所をしめている。

他の鎌倉彫の店をのぞいてから飛騨堂に入ってきた者なら、そこで作品の鮮かさに必ず目をみはる。一本の線の浮きぼりにしても、余分のものは捨て上澄みだけをとったという感じをあたえる。荒い鑿の一彫りで、雄勁な彫法であった。もちろん店内には竜次郎の作品だけを並べてあるわけではない。店で使っている八人の職人が造る品が店の四分の三をしめて飾られている。八人の職人のうち、五人が彫師で、二人が塗師、一人が機械を受けもっている。彫師のうち三人は竜次郎のでた美術学校の後輩で、竜次郎は春慶堂をでた年にこの三人を高給で迎え入れた。三人ともデザイン科出身で、鎌倉彫にデザインの新しさを加えてくれるほか竜次郎がこの三人に期待するものはなにもなかった。というのは、彼が美術学校でデザインを学んだのは方便にすぎなかったからである。彼が目ざしたのは鎌倉彫を量産して事業化することであった。まだ美術学校にはいる前、外国兵が、下駄屋が仕上げた土産品向きの鎌倉彫を骨董品なみの風雅な品に見立てて買っているのを街で見かけたとき、彼は鎌倉彫の量産化、事業化を思いついた。幼時から家業をみてきた彼は、もし職人仕事に一転機をもたらして工芸品を造り得、しかもそれが大量生産できたら、と考えた。

そんなわけで、飛騨堂の仕事場ではすべて流れ作業がお

こなわれている。手で盆をくりぬいたのは昔のことで、いまでは機械がやってくれる。そこに彫師が図案をきめて彫りこむ。つぎには塗師が漆を調合して塗る。腕のよい職人で簡単な図案なら一日にかなりの個数を彫ることができた。つまり竜次郎は鎌倉彫を二種類にわけていた。一つは工芸品、一つは大衆向きの実用品であった。実用品は量産した。東京のデパートに納める品はすべてこの流れ作業から量産したもので、飛騨堂の店先にもかなり並んでいる。竜次郎は、美術学校出身の三人の後輩に、つぎのように言ってきた。

「君達は職人だよ。芸術家だと思っはいけない」

三人の芸術家の卵が竜次郎の言葉を解するにはすこし時間がかかったようであった。

店に並んでいる品物をみると、やはり竜次郎の作品が他の職人のより秀れていた。彫刻刀をもちはじめたのが八歳のときだから、ともかく年季がはいっているわけであった。彼は自分の作品には自分で漆をかけ、一品一品みがきをかけた。飛騨堂を開いてからすでに四年たっていた。

彼の工房には四季を問わず益子焼の鉢にレモンが十数個盛られている。彼は仕事をしながらこのレモンをかじる。外出したら必ず果物屋によってレモンを求めてくる。レモンが好きなのは子供の頃からで、外出するときもレモンを数個ポケットにしにのばせていた。妻の京子は、彼がレモン

をかじっているのを見ただけで顔をしかめた。じっさい、
見ている方で酸っぱくなるほど、彼はうまそうにレモンを
かじっていた。数度、歯医者に診てもらったが、別に酸の
ために歯が損傷した形跡もなかったで、彼はいまでも日
によってはレモンを五、六個はかじっている。

「どうしてそんなにレモンが好きになったのかしら」

と京子は以前よく夫にきいた。

「女が菓子を好むようなものだろう」

と竜次郎は答えた。

いまでは京子は、夫が斬新な作品をうみ続けているのは、
もしかしたらレモンをたくさん喰べているせいかもしれない、
い、とほんきで考え、たかいレモンを惜しみなく工房に運
んでいた。レモンは工房のなかで光り輝いていた。

京子は能登堂からきた女である。能登堂は、春慶堂と同
じくらしいの老舗である。京子は、女きょうだい三人のうち
の次女に生まれ、竜次郎とは見合結婚であった。結婚当初、
彼はあたかもレモンをかじるように終日京子に没頭した。

京子は、当時を想いかえすたびに、あれがいちばん幸福な
時代ではなかったか、と思う。

夫にかまひすぎるな、というのが嫁入るときに父から与
えられた言葉であった。この言葉が紛れもない真実のひび
きをともなって京子にきこえてきたのは、最近である。子
供を二人うんだ京子からだは熟れきっていた。夫は相も

かわらず一日に数個のレモンをかじっていたが、昔のよう
には自分をかまってくれなかった。夫が工房にこもる日は
以前よりすくなくなっていた。いくらかまってくれないに
しろ、鎌倉彫の組合に顔をだしたり、輸出のことで走りま
わっているうちはよかった。最近はときどき行方不明にな
る日があった。外泊こそしなかったが、夜半に帰宅するの
がたび重なった。朝でて夕方帰ることもあった。問いつめ
てものらりくらりした返事で、尻尾をつかませなかった。
なにか隠しているにちがいない、と思ったが、正体がか
めなかった。この場合、どこの妻も例外なく考える、夫に
女ができたのではないか、という考えに京子もとらわれた
が、しかし夫にはそんなふしもみえなかった。求めればき
ちんと夫のつとめも果たしてくれた。しかし京子は為体の
知れない焦躁感にとりつかれていた。かまってくれないの
を憾みに思ったのははじめの頃で、いまは焦躁感のために
一種の神経病みのようになり、ときどき発作的に子供を叱
りつける日があった。

兄弟が離反してもその妻同士はいたって仲がよく、京子
はおりおり春慶堂に電話しては直子をよびだし、街で落ち
あつて食事をともにしたりした。そんなとき京子は、自分
の為体の知れない感情を直子に話すことがある。一週間ほ
ど前にも、二人は雪の下の鰻屋で落ちあい、京子は同じこ
とをこぼした。

「お姉さんは、うちのひとのことで、なにか、御存知ないかしら？」

「あら、奥さんのあなたが知らないのに、わたしにどうして判るの？」

直子は笑っていた。

「お姉さんの方が、あたしより早く春慶堂にいらしたでしょう。ですから、あたしがくる前に、うちのひとに女がいたかどうか……」

「それはそうですが、あなたの旦那さまのことまでは気がつきませんよ。竜次郎さん、ものにとられない性質だから、それはすこしは女に苦勞をかけるかもわからないわ。でも、いい旦那さんじゃないの。心配するほどのことではありませんよ。うちのひとみたいに、ああ家に閉じこもっているのより、よほどいいと思うわ」

「そうかしら……」

京子がみると、直子は若宮大路の段かずらの道を見おろし、桜の病葉が散るのを眺めていた。感情をあらわにしない女であったが、自分達夫婦が春慶堂をでてきてからは、いつ会っても、ものさびしい顔をしていた。

3

春慶堂の店構えは古風でどっしりしていた。店は、そこ

ら辺の店のようにごてごてと品物を並べず、たいそう贅沢に場所を使っている。並べてある品はいずれも手間のかかった作品ばかりである。竜次郎の作品を荒い鑿の一彫りであるとするれば、麟太郎の作品は、こまかい個所まで彫琢されている。しかし、店の棚にはほこりがつもっていた。

古い店の慣例にもれず春慶堂は店続きの奥に麟太郎の工房があった。店からみると、ガラス戸ごしに麟太郎はこっちに左半身を向けて坐り、彫刻刀を動かしている。ちよつと偏癡に似た恰好であった。客があつても愛想ひとつ言わない。だまつて品物を包んで渡し、だまつて金を受けとる。とても三十四歳の若者にはみえない。親しい友人もなく、偏屈で無口で傲岸であつた。たまに客が図柄を指定して新製品を造ってくれたのんでも、彼はこつた。彼は人から指図されるのを好まなかつた。製品には高い値をつけていた。横二十センチ縦三十五センチ高さ四センチの硯箱が八万円した。彼にしてみれば自作は工芸品であつた。八万円で高ければ買わなければよいのである。たとえ何十年店晒しになつたにしろ、そしてついにその作品が売れるのをみずに自分が死んでしまつたにしろ、作品に刻まれた弱々谷春慶堂五代麟太郎の名は残るはずであつた。四年前の夏のはじめ、弟竜次郎が春慶堂からでて行くとき、彼は弟をみて、おまえの仕事はそこの下駄屋がつくる品と同じだよ、と言つた。竜次郎はわらつて答へなかつたが、そば

にいた直子は、この人は一徹な職人気質でまっすぐにものを視つめ、別の面から対象に迫ろうとはしないから、竜次郎さんが兄弟の離反を悲しんでいるのを見ぬけないのだ、と思った。

直子は石女^{うますけ}だった。藤沢の酒問屋からきた女で、鎌倉彫に關してはなにひとつ知らなかったし、また知ろうともしなかったが、春慶堂にきて足かけ七年、よくつくしてくれたと麟太郎は思っていた。

直子はたいがい自分の居間にこもりきりで、頼まれた着物の仕立をやっていた。

隆正^{たふまさ}は死ぬ前にあらかじめ兄弟に財産をわけてあった。

竜次郎はその金で由比ヶ浜通りに店を買ってでたのであった。竜次郎がでた後の春慶堂では、職人もおかず、並べる品物も年々すくなくなり、麟太郎が丹精こめてこしらえた高い品物は売れず、持金が減る一方であった。麟太郎は凝り性で、一つの作品を仕上げるのに一カ月もかかり、ときによると三カ月もかかる作品があった。二年前の夏から、一個の作品も売れない月がしばしばあった。直子が着物仕立の内職をやりだしたのはこのときである。結構繁盛して、いまでは二人の生活を支えるまでになっていた。思いあまつた直子が、人を集めて鎌倉彫を教えては、とすすめたこともあったが、麟太郎は応じなかった。そして店の棚にはほこりがつもりはじめ、広い家のなかも、使わない部屋に

はほこりがたまっていた。

「なんとも言うようだが、藤沢へ帰ってくれないか。もう同じことは言いたくない。俺には、先が見えているのだ」

麟太郎がこう言ったのは去年の秋である。

「いまさら、わたしにも、どうしようもないことですわ」

直子は目を伏せながら答えた。

「これだけは、どうにもならんことだ」

「ええ、もう、それは、どうでもいいことです。ここを去らねばならないときがきたら、そうしますから」

直子はやはり目を伏せて答えた。

夫の言いかたは淡々としていた。それだけ懊惱^{おうぼう}が内部に沈潜してしまつたのだからか、と直子はそのとき暗澹^{あんたん}とした氣持で針仕事を続けた。

4

その料亭は、稲村ヶ崎から片瀬をへて辻堂に通じる海岸道路の途中にあった。バスをおりと、南が海で、北は松林の奥に鶴沼^{つるぬま}の街がひろがっており、松林のなかの砂地の道を行くと間もなく料亭がみえた。

竜次郎はその料亭で直子と逢^あいだしてからほぼ二年になるが、最初の日のことを彼ははっきり記憶にとどめていた。その秋の日のおそい午後、竜次郎が店の勘助に車を運転

させて藤沢駅前の表口を通りかかったとき、鎌倉行のバス停留所に、足もとをみつめて立っている直子を見た。ときどき飛騨堂^{ひでどう}にきては京子と話しあつて帰る姿をみていたが、いつもなにか思いつめた表情が竜次郎の心にひっかかっていた。藤沢の実家にきた帰りだろうと思つた。竜次郎は車からおり、勘助をさきに帰らせた。それから道路を渡つてバス停留所に歩いた。嫂^{しやう}さん、とよびかけたら、直子はびつくりしてこつちをみた。二人は近くのコーヒー店に入り、竜次郎は兄の近況をきいたりしたが、直子は話の途中で目に涙をにじませた。他人にぶざまな面をみせる女ではなかつたから、こんどは竜次郎がびつくりした。こんなところで話せませんわ、と直子が言つた。竜次郎は直子をつれてコーヒー店をでると、タクシイをつかまえ、めしをくわせてくれる静かな店はないか、と運転手にきいた。つまり二人が逢い続けている料亭は運転手が教えてくれたのである。その日、直子は、料亭で、かなりためらつたあげく、麟太郎^{りんたろう}が不能だと告げ、目を伏せた。

「それはいつからですか？」

しばらくして竜次郎がきいた。

「あなた方が、春慶堂をでて行かれた頃からすわ」

竜次郎には他人事^{ひとこと}と思へなかつた。家系にそんな血統でもあつたのか、と思わざるを得なかつた。このひとは京子ともよくあつていたのに、京子とのあいだではそんな話は

でなかつたのだろうか？

「京子にもこれを話されたのですか？」

「いいえ。誰にも言えないことですわ。あなたにだけ話したなんて、すこし変ですわね。誰にも話すつもりはなかつたのです」

そして、この日、料亭で二人のあいだにおきたことが過ちであつたかどうかは、当日の二人には判断がつかなかつた。数年も男を識^しらずにすごしてきた人妻に竜次郎が同情したということはない。そんなことを考える余裕はなかつた。

「竜次郎さんは、わたしに同情してくださつたの？」

直子は帰りがけにきいた。

竜次郎は返事をしなかつた。自分を弁解する余地はなかつたが、崖^{がけ}をまっしぐらに落ちてくるような直子の動きを想いかえし、俺達^{われたち}はたいへんなことをしてしまつたと思つた。

ともかく、これはきれいな関係ではない、と二人ともくちにはださずに同じことを考えたのは、半年ほど過ぎてからであつた。しかし直子にしてみれば、もはや竜次郎とははなれられなかつた。執着^{しやく}さえではじめ、京子^{きょうこ}いがいの女に竜次郎がふれるのは許せない氣もした。

それから二年が過ぎていたのである。いまでは思考の大

半が竜次郎に注がれていた。

この日も直子は、雨のなかを、仕立てた着物を長谷のあ
る邸まで届け、その足でまっすぐ鶴沼の料亭にいそいだ。

バスをおりと、雨に洗われた初冬の海岸道路では冷い
風が吹きぬけていた。なんど来ててもこの道では先が見えな
かった。消しようのない夫への愛情と竜次郎とのあいだの
灼きつくすような肉慾が、平行線を辿っていたのである。

心のなかで、水とほむらが共棲していた。かなしいと思っ
た。冷い風は、からだのなかまで吹きぬけて行つた。今日
で竜次郎とは十日以上も逢っていないかった。

料亭についたら、竜次郎はまだきていなかった。心得た
お内儀がいつもの部屋に案内してくれたが、今日もまた竜
次郎はこないのではないかとふっと危惧が心のなかをか
すめて去つた。

竜次郎は海岸道路におりたつたとき、かなり億劫な気持
だつた。あれほど節度のあつた女が、どうしてまたこんな
に妖怪じみてきたのだらうか、と春いらいの直子の狂態を
想いかえしては興ざめ、一方では前回の逢瀬の約束を守ら
なかったことで怯えてもいた。

兄とは数年もあつていなかった。最後にあつたのは、直
子とできる七カ月前で、その日は兄に頭をさげに行つたの
である。飛驒堂をひらいて二年、漆の調合だけは春慶堂に

かなわないと氣づいたのである。春慶堂にいた頃に造つた
作品がいくつもあり、亡くなった父が調合した漆が使って
あつた。自分が調合した漆をかけた作品とくらべてみて、
あきらかに差がみえた。素人目には判別のつかない微妙な
ちがいがあつた。漆がかけられてから年月がたつてみると
殊に差がはつきりみえた。艶といい色といい、ひとつひと
つに違いがあつた。そんなはずはない、と彼はさまざまに
漆の調合をかえてみた。下塗り、中塗りをいろいろ変えて
みた。朱のまぜぐあいも種々工夫してみた。しかし、春慶
堂の漆とは異なつていた。さすがにこのときだけは兄の仕
事の古さを噴えなかつた。隆正は亡くなるとき、如何なる
ことがあつても漆の調合の秘伝だけは職人に伝えるでない、
とかくいしましめた。秘伝をおぼえた塗師が一本立ちして
春慶堂を離れるからである。竜次郎は父がそう言ったのを
おぼえていた。彼はそのとき、一子相伝などという古くさ
いものが現代に通用するはずがない、と父の遺言をききな
がしてしまつていた。彼はそんなことを想いかえしながら、
酒をさげて春慶堂を訪ねた。

「いまになって氣づいたのか」

麟太郎は冷やかに言つた。

「兄さん、教えてもらいたい」

「教えるわけにはいかな」

「なぜだ？」

「一子相伝という理由だけだ。やるなら独りでやれ。春慶堂の漆はモダン・アートには使えないんだ」

「兄さん、ずいぶん卑怯な言いかたをするね。俺は同じ子として父がのこしたものをききにきたのだ。一子相伝などという古くさいものが通用する時世か」

「古くさくて結構だ。独りでやれ」

「兄さんは、俺がここをでるとき、俺を下駄屋とののしつた。ここをでたのは俺の意志ではなかった。それは兄さんも知っているはずだ。兄さんは自分の作品を芸術品だと固く信じている。結構なはなしだ。だが、春慶堂はそれで成りたって行っているのかね。職人は兄さんの性格にやりきれず、みんな俺について飛驒堂にきた。もうすこし春慶堂の看板を考えたらどうだね。何代も続いてきた店だ。下駄屋とののしられている俺は、日本中の一軒の家に一個の鎌倉彫を、というのをねらってきた。一個千円のお椀が飾りものになるよりも、一個二百円のお椀を家中で人数だけそろえる、そんなときがくるのを俺は考えていた。俺は兄さんに、兄さんの仕事のかたわら、俺の仕事の協力者を期待していたが、兄さんはいつのまにか自分だけの小さな殻に閉じこもってしまい、ついには、ここから俺を追いだしてしまった。兄さんの彫刻がいくらよくても、鎌倉彫ではほんとうの彫刻はできないよ。立体感がだせるには限度があるというものだ。鎌倉彫が工芸品になるのは結構なはなし

さ。だが、このさびれ果てた店を、これ以上どうやって守るつもりかね。はっきり言うが、鎌倉彫は芸術家のやる仕事ではない。職人がやる仕事だ。彼等は自分の作品を芸術品だと勘ちがいしているにすぎない。俺は、半分は工芸品で半分は実用品を店に並べたかった。もちろん兄さんの作品だけを工芸品と称してもよかった。そして俺の作品はすべて実用品と称されてもかまわなかった。つまり、そこらの下駄屋にはない工芸品を、安く日本中にゆきわたらせたかった。だが兄さんにはそれが判らなかった。いや、判っていないながら自分だけの小さな殻に閉じこもってしまった。もういちど考えなおす時間はあるよ」

「おまえは、自分の理想を述べにここに来たのか。ともかく漆の調査は自分でみつけれ。帰ってもらおうか」

「よからう。教えてくれなくともいいだろう。そんなむずかしい秘伝などがあるわけがない。自分でみつけることにするよ」

「春慶堂の漆の調査は、鎌倉中の塗師がいくら研究しても判らない技術だ。それを、おまえ如きなまはんかな下駄屋に教えてたまるか。モダン・アートなどやめて性根を叩きなおして出直してこい。そうしたら教えてやろう。帰ってくれ」

「兄さんこそ性根を叩きなおすんだな」

・竜次郎は捨台詞して春慶堂をでてきた。

以来、漆の調合が彼の課題となった。彼は兄を恨まず、気の毒だと思った。そして、直子とできてからは、うしろめたさを感じた。直子に関しては、はっきり悔いていた。下駄屋と罵った兄を恨まなかった、といえは嘘になるが、直子から兄の秘密をきいてからは、気の毒だという感じがさきにたつたのである。

彼は雨のなかを砂地の道を料亭にむかいながら、できればこのまま引きかえしたいと思った。直子から憾みをきかれるのには慣れていたが、歡樂が終つてからもこんどは別の憾みをきかされた。妻や直子がいゝの女をしろないわけではなかったが、直子とこれほどまで深みにおちこむとは考えていなかった。それまでは、女は彼にとって常に衣服の清涼剤にすぎなかったのである。

竜次郎は、女に逢う氣持をととのえて部屋に入った。

「嘘つき！ このあいだはどうして約束をやぶつたの。わたしが仕立物を届ける以外の日は外出しにくいことを承知じゃないの」

直子は炬燵から顔をあげ、こつちをにらんでいた。

「それは承知しているが、あの日は組合の寄合があり、どうしても脱けられなかったのだ。わかつてくれ」

「組合を独鈞にとるつもりなんですか」

「どっこにとる？ また、えらい古い言葉がでてきたな。」

口実にするつもりはない。事実を言っているんですよ」

彼は炬燵に入りながら、この女をこれ以上狂わせてはいけない、と思った。

「いったい、あなた、わたしをなんだと思っているの。わたしは、あなたのなんにあたるの」

「なにを言いたいんだ？」

「あなたのおめかけ？ それとも遊び相手？」

「おめかけや遊び相手にこんな氣のつよい女がいるものか」

「じゃあ、なんなのよ。きかせてちょうだい」

直子は炬燵蒲団をはねのけてにじりよつた。膝が割れ、赤い長襦袢があらわになった。あとはいつものことになり、二人は寢床にはいった。竜次郎はいつも兄を意識していたが、直子はいつもの前だけをみていた。女には現実だけしか見えないのだろうか、と彼は女の痴態におぼれて行きながら考える。直子は固い筋肉質のからだで、あかるいところでも彼の求める仕種に應じてくれた。そして、十日間たまつた分をいちどにはきだして彼にぶつかってくる。直子は彼によって女として開眼したようであった。麟太郎がああなる前にも、こんなになつたことはなかった、と直子は数度もらしたことがある。だが、どうすれば、この女と切れるか、と竜次郎は女のからだに埋没して行きながらも考える。二人の關係がきれいでない、ということがいつも